

# {-ar-} 型自動詞と、対応する他動詞の派生関係 について

## 一 『日本国語大辞典精選版』の初出年代から比較した有対自動 詞の性質について一

関口雄基

キーワード：自他対応、派生、接辞{-ar-}、脱使役化、形容詞派生動詞、degree achievement

### 要 旨

本稿では、〈植わる〉vs. 〈植える〉、〈曲がる〉vs. 〈曲げる〉、〈刺さる〉vs. 〈刺す〉のような、{-ar-} 型自動詞とそれに対応する他動詞の対を対象に、『日本国語大辞典 精選版』における初出年代を比較し、自動詞が遅れて生まれてくる対と、そうでない対で動詞の意味的特徴に違いがあることを主張する。また、杉岡 (2002) の論を中心に、〈温まる〉vs. 〈温める〉のような、形容詞派生動詞の対が、典型的な {-ar-} 型動詞対とは異なる特殊な性質を持つことについて考察し、主に degree achievement (程度変化) の側面において、自動詞が遅れて生まれるタイプと、そうでないタイプの間に違いが見られることを主張する。

### 1. はじめに

日本語には、〈植わる〉vs. 〈植える〉、〈曲がる〉vs. 〈曲げる〉、〈刺さる〉vs. 〈刺す〉のように、接辞 {-ar-} を持つ自動詞と対応する他動詞の対が存在する。このような形態の自他対は、その語数の多さや造語力の高さ、接辞 {-ar-} の意味的な特徴などから、これまで広く注目がされてきた。西尾 (1954) は、〈植わる〉vs. 〈植える〉のような、{-ar-} 型自動詞と {-e-} 型他動詞 (母音語幹動詞) の対に着目し、通時的に {-e-} 型他動詞が早い時代に成立するのに対して、対応する {-ar-} 型自動詞は成立が遅れる傾向があることを指摘した。また、{-e-} 型他動詞から {-ar-} 型自動詞が生み出さ

れる生産性は、他の形式の自他対における派生関係に比べて非常に高く、現代語においても〈活かる〉〈求まる〉といった動詞が生み出されることや、〈沈む〉 vs. 〈沈める〉、〈合う〉 vs. 〈合わさる〉といった他の形式の自他対から〈沈まる〉、〈合わさる〉といった動詞が生み出されることがあることが西尾 (1954) によって指摘されている。また、自他対における {-ar-} 型自動詞は、他からの外的な力を必要とするような、状態変化的意味を表す傾向にあることが、須賀 (1980) や影山 (1996) 等によって指摘されている。影山 (1996) は接辞 {-ar-} による自動詞の派生の仕方を「脱使役化」とし、接辞 {-ar-} は、使役主を意味構造において抑制し、統語構造に投射しないことで自動詞化を行う機能があることを指摘した。

(1) 脱使役化の派生メカニズム (影山 1996)

- a. e.g. 植える {uwe-ru}: x control[y become [y be at planted]]
- b. e.g. 植わる {uw-ar-u}:  $\emptyset$  control[y become [y be at planted]]

影山 (1996) によれば、接辞 {-ar-} を含む自動詞は、何らかの使役主の作用によって起こる変化を表す傾向があるという。例えば、(1) に挙げた〈植わる〉という動詞は、何かが自らの性質によって「植わる」という状態になることは考えにくく、必ず「植える」という行為を行う使役主 (動作主) の存在が必要になる。つまり、〈植わる〉という動詞は、〈植える〉という他動詞の意味構造に存在していた使役主 (x) が統語上抑制され、 $\emptyset$  として表出されることによって、自動詞化が起こることになる。影山 (1996) では、「脱使役化」によって派生した動詞は、① 使役主 (動作主) がいないことを示唆する副詞「勝手に」と共起しにくいこと、② 命令文化しにくいこと、③ 使役行為から結果状態への推移が容易かどうかを述べる副詞「難なく」「どうしても」と共起しやすいこと、④ 道具・手段を表す副詞と共起しやすいこと等が指摘されている。

(2) 副詞「勝手に」との共起が不可能

- a. \*勝手にに箱に本が詰まった。 (影山 1996: 189,(119a))
- b. \*勝手にに庭に木が植わった。 (影山 1996: 189,(119b))
- c. \*ピカソの絵が勝手にに壁に掛かった。 (影山 1996: 189,(119c))

(3) 命令文化することが不可能

- a. \*木よ植われ。 (影山 1996: 190,(122a))

- b. \*絵よ、壁にうまく掛かれ。 (影山 1996: 190,(122b))
- c. \*本よ、きちきちに詰まるな。 (影山 1996: 190,(122c))
- (4) 副詞「難なく」「どうしても」との共起が可能
- a. どうしても、この木はうまく植わらない。 (影山 1996: 185,(104))
- b. どうしても、目標金額が集まらない。 (影山 1996: 185,(104))
- c. (募金集めで) 難なく目標金額が集まった。 (影山 1996: 185,(103))
- d. (力を合わせて押すと) 鉄の扉は難なく閉まった。 (影山 1996: 185,(103))
- (5) 道具・手段を表す副詞との共起が可能
- a. クレーンを使って、ようやくその大きな木が植わった。 (影山 1996: 185,(107a))
- b. 四方八方手を尽くして、ようやく目標金額が集まった。 (影山 1996: 185,(107b))

また、影山 (1996) によれば、他動詞文において存在していた使役主は、統語上抑制されるため、「～によって」等の形式であっても、{-ar-} 型自動詞と共起することは出来ないという。

- (6) 使役主 (動作主) 「～によって」句との共起
- a. \*市の職員によって桜の木が公園に植わった。 (影山 1996: 187,(113a))
- b. \*ボランティアの学生によって募金が集まった。 (影山 1996: 187,(113b))

影山 (1996) はいわゆる自動詞と他動詞の対応関係を英語と比較し、日本語における自動詞と他動詞の派生メカニズムと意味の関係を統一的に考察した研究として、その価値は高いものと言える。しかしながら、{-ar-} 型自動詞には、下記のように動作主を主語に取る場合や、事象が成立するために、その事象の引き起こし手である使役主の存在を必ずしも必要とせず、自然発生的な意味として解釈される場合など、「脱使役化」とは言い難いものも、少なからず存在している。

- (7) 「脱使役化」とは言い難い {-ar-} 型自動詞
- a. 聖子は二階へ上がっていった。 (嵐山光三郎『蘭の被膜』)
- b. 碑文谷二丁目の信号から見当をつけて、千春は左へ曲つた。  
(夏樹静子『訃報は午後二時に届く』)

- c. 映画館の前に、人が集まっていた。 (西村京太郎『上野駅殺人事件』)
- d. ドレンホースにごみなどが詰まっている。 (Yahoo! 知恵袋)
- e. 祐也の心臓が止まった。 (久和まり『Stay gold』)

例えば、(7a)~(7c)に挙げた、〈上がる〉〈曲がる〉〈集まる〉は、それぞれ主語に「聖子」「千春」「人」という動作主を取っており、動作主自らの意志によって「(二階に)上がる」「(左へ)曲がる」「(映画館の前に)集まる」ことが容易に想定出来る。また、(7d)(7e)に挙げた〈詰まる〉〈止まる〉の場合も、誰かが「ゴミをドレンホースに詰める」「祐也の心臓を止める」という行為の存在は前提になっておらず、使役主が存在するとは限らない、自然発生的な事象と解釈出来る。このように、{-ar-}という接辞を持つことと、動詞が脱使役の意味を持つことは必ずしも同値にはならないと推測される<sup>1</sup>。また、影山(1996)をはじめ、日本語の自他對を派生現象として捉える研究は、基本的にある一定時期における動詞の意味や出現頻度、更には他の言語との比較によって分析がなされてきたものが多い。しかしながら、派生という現象にはどちらの形式が先に生まれ、どちらの形式が遅れて生まれたのか、またどのような特徴を持つ形式から、どのような形式が生まれやすいのかという歴史的側面が少なからず存在する。しかしながら、現代語の自他對について歴史的な派生関係と形態・意味の関連に踏み込んで分析を行った研究はこれまであまりなされてこなかった<sup>2</sup>。現代語の自他對における語彙の意味や文法的特徴について明らかにするためにも、どちらが先に生まれ、どちらが遅れて生まれたのかという縦の軸からの観点が必要になると考える。

本稿では、こうした {-ar-} 型動詞を含む自他對について、『日本国語大辞典 精選版』の初出年代に基いて、派生パターンを整理するとともに、動詞が持つ語彙の意味や文法的な特徴について考察を試みる。また、先行研究において指摘される {-ar-} 型自動

<sup>1</sup> 影山(1996)に対する批判は、MATSUMOTO(2000)や、高橋(2015)、新沼/木戸(2016)等が詳しい。中でも、高橋(2015)は、経験的側面に加えて、「語形成規則は意味を取り除かない」という原則に反することから、理論的側面においても影山(1996)の分析には問題があることを示している。

<sup>2</sup> こうした問題に対し、ナロック(2007b)は、日本語の通時的な自他對の派生関係を『日本国語大辞典 第二版』における初出年代から分析し、日本語の自他の形態的な有標性について類型論的な立場から分析を行った。ナロック(2007b)の調査の結果、日本語は基本的に自動詞を基盤とした他動化言語であるが、時代が下るにしたがって他動化型が減少し、非他動化型や、自動詞と他動詞が同じ形式になる不定型が増加していったという。本研究はナロック(2007b)の手法を参考にし、日本語の自他對における形態と意味の派生関係を質的に分析してすることを目指す試みである。

詞の語彙的意味や文法的特徴は、他動詞形に比べて自動詞形が遅れて生まれたか否かによって大きく左右されることを主張する。更に、詳しくは 4 節で述べるが、他の対に比べて変化の自律性と段階的な程度変化 (degree achievement) という点において特異な性質を持ち、同一の観点で分析するのが難しい、〈温める〉vs. 〈温まる〉のような、形容詞派生動詞の自他対について、主に杉岡 (2002) の分析を参照しながら、歴史的な派生パターンと動詞の文法的特徴の関係について考察を試みる。

## 2. 調査の方法

ナロック *et.al* (2015) 『現代語自他対一覧表 Excel 版』 (<http://watp.ninjal.ac.jp/resources/>) において、「II 非他動化対、1.Vc>V + ar 型、2.Vv>V + ar 型」に分類されている自他対の『日本国語大辞典 精選版』における初出年代を調査した<sup>3</sup>。この中から〈突き刺す〉vs. 〈突き刺さる〉のような複合動詞類、初出年代が明記されていないもの、そして〈埋める〉vs. 〈埋もれる〉や〈捕われる〉vs. 〈捕らえる〉等、自動詞形が母音語幹動詞になっている対のように、先行研究で問題とされている〈植わる〉、〈受かる〉のような子音語幹動詞の {-ar-} 型自動詞を含む対とは明らかに形態的な様相を異にしているもの<sup>4</sup>を除いた自他対について「自動詞が遅れて生まれてくる自他対」、「初出年代にそれほど差が見られない自他対」<sup>5</sup>、「他動詞が遅れて生まれてくる自他対」

<sup>3</sup> 語が派生した当初の意味と現代語の意味が異なっている場合が考えられるが、本研究では基本的に『日本国語大辞典 精選版』に掲載されている最も古い用例を採用した。但し、〈止まる〉と〈泊まる〉のように、現代語において明らかに同音異義語と判断される語が同一の項目に立項されている場合は、筆者の内省に基づき、出来る限り現代語の意味に合致する語釈における用例の初出年代を採用している。また、元の表では一部〈広がる〉と〈拡がる〉や〈静まる〉と〈鎮まる〉、〈閉まる〉と〈締まる〉のように表記の異なるものも別の語として立項されているが、明らかな意味的違いがなく、必ずしも別の語として扱う必要はないものについては、本研究では同一の語と見なし、初出年代を出している。

<sup>4</sup> 具体的には、〈剥がれる〉vs. 〈剥ぐ〉、〈うずもれる〉vs. 〈うずめる〉、〈廢れる〉vs. 〈捨てる〉、〈生まれる〉vs. 〈生む〉、〈結ばれる〉vs. 〈結ぶ〉、〈うもれる〉vs. 〈うめる〉、〈捕われる〉vs. 〈捕らえる〉、〈走る〉vs. 〈馳せる〉、〈混じる〉vs. 〈混ぜる〉、〈分かれる〉vs. 〈分ける〉を表からは除いて分類している。

<sup>5</sup> 「初出年代にそれほど差が見られない自他対」には自動詞と他動詞の初出年代が共に上代であるものも含まれている。この場合、文献上遡れる時代以前に語が成立していた可能性もあるため、両者間に、必ずしも「初出年代に差が見られない」と言うことは出来ないが、本研究では自他対の分類の便宜上、ひとまず「初出年代にそれほど差が見られない自他対」という一つのカテゴリに分類することにした。

の3つのパターン<sup>6</sup>に分け、それぞれの動詞の特徴について考察を試みた。第3節では、まず、形容詞派生動詞の自他対以外の {-ar-} 型動詞を含む自他対について、それぞれのパターンを詳しく見ていくこととする。そして、続く第4節では形容詞派生動詞の自他対について、詳しく見ていくこととする。

### 3. 自他対の派生パターンと動詞の類型について（形容詞派生動詞以外の動詞）

#### 3.1. 自動詞が遅れて生まれてくる自他対

本節では、「自動詞が遅れて生まれてくる自他対」について分析を行う。(8)の表は、『日本国語大辞典 精選版』の初出年代を比較した際に、自動詞が100年以上遅れて生まれてくる自他対である。表の網掛け部は現代語において自動詞と他動詞の対応が希薄と考えられるものを示している。これらの動詞対について筆者の内省に基づき、現代語における自動詞の意味や文法的な性質から表の3列目（「分類」欄）のように、大まかな分類を行った。

#### (8) 自動詞が遅れて生まれてくる自他対

自動詞形				他動詞形		
口語形	文語形	分類	初出年代	口語形	文語形	初出年代
刺さる (挿さる)	†刺さる	付	1241『観智院本名義抄』	刺す (挿す)	†刺す	712『古事記』
つかまる	†つかまる	受	1809-13『滑稽本・浮世風呂』	つかむ	†つかむ	850『大智度論平安初期点』
つながる	†つながる	付	1800『洒落本・南遊記』	つなぐ	†つなぐ	712『古事記』
尖る	†尖る	状 (物)	1022『大日経治安二年点』	研ぐ	†研ぐ	8C後『万葉集』
合わさる	†合わさる	付	1947《平野謙》『女房的文学論』	合わせる	†合わす	9C末-10C初『竹取物語』 <sup>7</sup>
言いつかる <sup>8</sup>	†言いつかる	受	1870-76《仮名垣魯文》『西洋道中膝栗毛』	言いつける	†言いつく	947-957『大和物語』

<sup>6</sup> 基本的に一方が生まれてからもう一方が生まれるまでに100年以上経過しているものを「自動詞が遅れて生まれてくるもの」「他動詞が遅れて生まれてくるもの」としている。

<sup>7</sup> ここでの初出の意味は〈合わせる〉「ある事に応じて行う。ある事がなされる時に一致するように行う。」「つけ加える。またいっしょにする。ひとつにまとめる。合計する。」である。尚、〈会わせる〉「夫婦にする。結婚させる。めあわす。」「武器を互いに打ち合わせる。立ち向かわせる。戦わせる。」の初出は720『日本書紀』になっている。

<sup>8</sup> ナロック *et al* (2015) 表では〈言いつかる〉を自動詞として分類しているが、「子供が母親に買い物を買いつかった」(杉本 1991: 243,(60b)) のような構文を取ることから、他動詞的側面を持つと考えられる。尚、杉本 (2001) では、〈言いつかる〉を他動詞的な受動詞(他受動詞)として分類

受かる	†受かる	可	1922《葛西善蔵》『不良児』	受ける	†受く	720『日本書紀』
うず埋まる	うず†埋まる	付	1867『和英語林集成』	うず埋める	うず†埋む	850『大唐三藏玄奘法師表啓平安初期点』 <sup>9</sup>
埋まる	†埋まる	付	14C後『太平記』	埋める	†埋む	720『日本書紀』
植わる	†植わる	付	9C前-11C中『風俗歌』	植える	†植う	712『古事記』
納まる (収まる)	†納まる	付	1001-14『源氏物語』 <sup>10</sup>	納める (収める)	†納む	720『日本書紀』 <sup>11</sup>
修まる	†修まる	状 (事)	1001-14『源氏物語』 <sup>12</sup>	修める	†修む	720『日本書紀』 <sup>13</sup>
かぶさる	†かぶさる	付	1694『俳諧・別座舗』	かぶせる	†かぶす	1563『玉塵抄』
決まる	†決まる	状 (事)	1770『浄瑠璃・神靈矢口渡』	決める	†決む	1028-92『荣花物語』
縮まる (閉まる/絞まる)	†縮まる	状 (物)	1420『応永本論語抄』 <sup>14</sup>	縮める (閉める/絞める)	†縮む	13C前『平家物語』
すぼまる	†すぼまる	状 (物)	1603-04『日葡辞書』	すぼめる	†すぼむ	14C後『太平記』
据わる	†据わる	付	14C前『源平盛衰記』	据える	†据う	712『古事記』
添わる	†添はる	付/状	905-914『古今和歌集』	添える	†添ふ	712『古事記』
助かる	†助かる	可	970-999『宇津保物語』	助ける	†助く	720『日本書紀』
縮まる	†縮まる	状 (物)	15C後『和玉篇』	縮める	†縮む	14C後『太平記』
浸かる (漬かる)	†浸かる	付	13C前『平家物語』	浸ける (漬かる)	†浸く	720『日本書紀』
勤まる (務まる)	†勤まる	可	1711『浮世草子・傾城禁短気』	勤める (務める)	†勤む	720『日本書紀』
つぼまる	†つぼまる	状 (物)	1772-1817『雑俳・伊勢冠付』	つぼめる	†つぼむ	1603-04『日葡辞書』
詰まる	†詰まる	状 (物) / 付	1212-15『古事談』	詰める	†詰む	10C後『落窪物語』
泊まる	†泊まる	付	935『土佐日記』	泊める	†泊む	8C後『万葉集』

している。

<sup>9</sup>ここでの初出年代は子音語幹動詞〈うづむ〉のものである。なお、現代のような母音語幹動詞〈うずめる〉の初出年代は1593『天草版伊曾保物語』である。

<sup>10</sup>ここでの初出の意味は「外に現れ出たものが引つ込む。消える。弱まる。」である。「ある範囲内に全部が残らずにいる。また、神仏などが、ふさわしい場所に位置を占める。」という意味の初出は1110年『百座法談』である。

<sup>11</sup>ここでの初出の意味は「他への働きかけのために出していたものをもとの場所へ戻す。武器や道具などを引つ込める。しまい込む。片づける。」である。

<sup>12</sup>ここでの初出の意味は「行い、態度、心などが整ってよくなる。」である。

<sup>13</sup>ここでの初出の意味は「自分の行い、態度、心などを整え直す。」である。

<sup>14</sup>ここでの初出は「ゆるみがなくなる。しめつけられる。きつくなる。」という自動詞用法の〈縮まる〉のものである。なお、〈縮まる〉には同じ形で「かたく結ぶ。しっかり固める。」という意味の他動詞用法が存在し、こちらの初出は712『古事記』である。

始まる	†始まる	状 (事)	905-914『古今和歌集』	始める	†始む	8C後『万葉集』
はまる	†はまる	付	1241『観智院本名義抄』	はめる	†はむ	8C後『万葉集』
負かる	†負かる	状/可	1798『咄本・無事志有意』	負ける	†負く	720『日本書紀』
混ざる	†混ざる	状 (物)	1802-09『滑稽本・東海道中膝栗毛』	混ぜる	†混ぜ	720『日本書紀』
まとまる	†まとまる	状 (物/事)	1810『歌舞伎・絵本合法衢』	まとめる	†まとむ	1275『名語記』
見つかる	†見つかる	受	1767『雑俳・柳多留-二』	見つける	†見つく	9C末-10C初『竹取物語』
儲かる	†儲かる	可	1800『洒落本・南門鼠』	儲ける <sup>15</sup>	†儲く	1120『今昔物語集』
ゆだる	†ゆだる	状 (物)	1603-04『日葡辞書』	ゆでる	†ゆづ	7C後-8C『催馬楽』
横たわる	†横たはる	付/状	1001-14『源氏物語』	横たえる	†横たふ	720『日本書紀』

(状: 状態変化を表す動詞類 (物: 物体の変化を表すもの、事: 事象の変化を表すもの)、付: 付着の意味を表す動詞類、可: 可能の意味を表す動詞類、受: 受動詞類)

動詞が多義である場合があるため、一つの動詞の意味が複数のカテゴリーに跨ることもあるが、凡そ「自動詞が遅れて生まれてくる自他対」には「物体の変化を表す動詞類」、「事象の変化を表す動詞類」、「付着の意味を持つ動詞類」、「可能の意味を表す動詞類」、そして、杉本(1991)等によって指摘される他動詞文の動作主が自動詞文では二格で現れるという文法的特徴を持つ、「受動詞」と呼ばれる動詞が多く含まれている。以下では、それぞれの分類について、いくつかの例を挙げながら詳しく見ていく。まず、(8)の表において分類を「状(物)」としたものは、概して物体の状態変化を表すと考えられる動詞である。(9)は、NINJAL-LWP for BCCWJ (国立国語研究所) (以下NLB) において出現する、この動詞の用例の一部である。

### (9) 物体の変化を表す動詞類

- a. 頭に三角ぼうしをかぶり、足首のところがつぼまっているダブダブのズボンをはいているピエロは、からだを弓のように曲げていた。  
(石井睦美『五月のはじめ、日曜日朝』)
- b. 卵を溶いて少しずつ加えながら混ぜ、卵が混ぜったら、レモンの皮をすりおろしながら加えて混ぜる。  
(舘野鏡子『お菓子作り入門』)

<sup>15</sup> 〈儲ける〉は『日本国語大辞典精選版』において〈設ける〉と同一の項目に記されている。ここでの初出の意味は「思いがけない得をする。利益を得る。また、金銭の利益を得る。利潤を得る。」である。なお、「前もって用意・準備する。用意し整える」の意味の初出は 8C 後『万葉集』になっている。

- c. その火加減でないと蕎麦がきれいに茹だらないし、出し汁も出ない。  
(藤村和夫『蕎麦屋のしきたり』)
- d. バターに黒糖を加えてすり混ぜ、ミキサーにセットして、中強力粉と1を順に加えて低速で5～6分間、生地がまとまるまでよく混ぜる。  
(堀江新『焼き菓子の秘訣』)
- e. 洗面所の排水溝が詰まってしまって水が無くなるのに時間がかかります。  
(Yahoo! 知恵袋)

例えば、(9a)に挙げた〈つぼまる〉という動詞は、「ズボン」の「足首」の部分が、細くなっているという、物体自体の状態が変化していることを表していると解釈される。また、(9b)の〈混ざる〉という動詞も、「卵」が元の状態から、「混ざった」状態に物理的に変化していることを表していると考えられる。(9c)(9d)(9e)に挙げた〈茹だる〉〈まとまる〉〈詰まる〉という動詞も、それぞれ「蕎麦」「生地」「排水溝」が、「鍋で煮られて食べられる状態に変化する」「一つに集まった状態になる」「塞がれた状態になる」という、対象が状態変化をすることを表していると解釈出来る。次いで、(8)の表において、分類を「状(事)」としたものは、概して事象の変化を表す動詞であると考えられる。(10)は、NLBにおいて出現する、これらの動詞の用例の一部である。

#### (10) 事象の変化を表す動詞類

- a. 11月に結婚することが決まりました。(Yahoo!知恵袋)
- b. 翌年三十七年二月、日露戦争が始まった。鷗外(四十二歳)は第二軍軍医部長として大陸へ遠征し、南山攻撃に加わり、これはやがて『うた日記』としてまとめられることになる。(嵐山光三郎『美沙、消えた。』)
- c. はい、それでは今日はずいぶん長くなりましたが、内容がまとまったようですのでこの辺でおわりにしたいと思います。  
(中村彰彦『竜馬伝説を追え』)

例えば(10a)の〈決まる〉という動詞は、対象に「結婚すること」というコト名詞句を取り、「結婚すること」という事象が決定したことを表している。また、(10b)の〈始まる〉という動詞も対象に「日露戦争」という事象を表す語を取り、「日露戦争」という事象が生起したことを表している。〈まとまる〉という動詞は、(9d)のような

「物体の変化を表す動詞類」としての側面を持つ一方で、(10c)のように、「内容」のような事象を表す名詞が「整理がついた状態」に変化するという「事象の変化を表す動詞類」としての側面も持つと考えられる。

(8)の表の分類を「付」としたものは、概して対象物が何かに付着することを表すと考えられる動詞類である。(11)は、NLBにおいて出現する、これらの動詞の用例の一部である。

#### (11) 付着の意味を表す動詞類

- a. 立石は胸にナイフが刺さっている死体を見たんだろう。  
(宗田理『僕らの「第九」殺人事件』)
- b. 庭には桜の大木が植わっていた。  
(岡崎大五『添乗員疾風録』)
- c. この施設は五十二軒の家と専用回線がつながっており、月に三～五件の連絡があるという。  
(磯部裕三『会社人間ボランテア奮闘記』)
- d. 唐院は智証大師が唐から将来したものを納めているお堂で、黄不動などがこの中に納まっています。  
(五来重『霊場巡礼』)
- e. 本やノートまで茶色い水に漬かっているが、そのまま放置はできない。  
(見沢知廉『調律の帝国』)
- f. キセルには、なにか濃い茶色のやにのような物がつままっていて、それが、アルコールランプの火の上でじくじくと煮立っているように見えます。  
(阿部初枝『看護婦一年生』)

例えば(11a)に挙げた〈刺さる〉という動詞は、「ナイフ」が「胸」に突き立ち、刃の部分がまさに「胸」に付着している事象を表していると考えられる。また、(11b)の〈植わる〉も対象である「桜の大木」が、使役主(動作主)の「植える」という行為によって、まさに「植えられた」状態になり、「庭」の地面に接着していることを表していると言える。(11c)の〈つながる〉は、物理的な付着を表している訳ではないが、「専用回線」と「五十二軒の家」が一続きになり、常に連絡が出来るような状態になっているということから、比喩的に両者が接続され、付着した状態になっていると解釈することが出来るだろう。尚、〈詰まる〉は、前掲の(9e)のように、「排水溝」という「詰まる」場所を対象に取る「物体の変化を表す動詞類」としての側面を持つ

一方で、(11f) のように、「詰まる」物体を対象に取る「付着」を表す動詞としての側面も併せ持つと考えられる<sup>16</sup>。

(8) の表において分類を「可」としたものは、概して「可能」の意味を持つと考えられる動詞類である。(12) は、NLB において出現する、これらの動詞の用例の一部である。

(12) 「可能」の意味を表す動詞類

- a. 慶喜は賢明のほまれ高く、すぐにも将軍が勤まるとされた。  
(池田亮二『お墓曼陀羅』)
- b. 心臓と呼吸が止まってから、何もしないでいると命が助かる可能性は10分間で急激に低くなります。  
(『広報ひだ』岐阜県)
- c. 例えば、特許の一つ取って莫大な金がもうかったという企業があるわけですよ…  
(国会議事録, 常任委員会)

例えば (12a) の〈勤まる〉という動詞は、「慶喜」という人物が「将軍」という役職を「勤めることができる」という意味を持っている。また、(12b) の〈助かる〉も「命」が、何らかの処置によって「救われた状態」になることができるという点において、「可能」の意味合いを持つと考えられる。更に、(12c) の〈儲かる〉という動詞も、「特許の一つ取る」ことによって、「企業」が「莫大な金」を儲けることが出来、利益が得られたという点において、「可能」の意味を持っていると解釈することが出来るだろう。

---

<sup>16</sup> 〈詰まる〉は、(i) のように、「～ガ～デ V」「～ニ～ガ V」という二種類の構文を持つと考えられる。

- (i) a. 灯油が吹き出すノズルがゴミで詰まっていた。(Yahoo!ブログ)
- b. 灯油が吹き出すノズルにゴミが詰まっていた。

このような現象は、いわゆる「壁塗り代換」と呼ばれ、これまで研究が蓄積されてきた事項である。川野 (1997) (2001) (2006) 等は、「～ガ～デ V」の形式を「状態変化構文」、「～ニ～ガ V」の形式を「位置変化構文」として位置づけている。本研究では、この区分に従い〈詰まる〉は「状態変化構文」と「位置変化構文」という二種類の構文を形成する動詞と捉える。しかしながら、「位置変化構文」において対象となる要素は、実質的に移動しているとは捉えにくく、〈上がる〉(集まる) のような動詞とは異なる性質を持つと推測される。本研究では、両者を区分するため〈詰まる〉のような動詞を「付着の意味を持つ動詞類」、〈上がる〉(集まる) のような動詞を「位置変化を表す動詞類」として区分したい。

そして、(8)の表において、分類を「受」としたものは、杉本(1991)、孟(2011)等によって議論される、他動詞文の動作主が自動詞文では二格で現れるという文法的特徴を持つ、「受動詞」と呼ばれる動詞である。

(13) 通常の自他交替

- a. 荷物が<sup>が</sup> 家に 届いた。 (杉本 1991: 238, (31a))  
b. 宅急便屋が 荷物を<sup>を</sup> 家に 届けた。 (杉本 1991: 238, (31b))

(14) 受動詞類

- a. 警官が<sup>が</sup> 泥棒を 捕まえた。 (杉本 1991: 238,(28b))  
b. 泥棒が 警官に<sup>に</sup> 捕まった。 (杉本 1991: 238,(28a))  
c. 泥棒が 警官に<sup>に</sup> 捕まえられた。 (杉本 1991: 238,(33b))  
d. 先生が<sup>が</sup> 家出した生徒を 見つけた。 (杉本 1991: 240,(40a))  
e. 家出した生徒が 先生に<sup>に</sup> 見つかった。 (杉本 1991: 240,(40b))  
f. 家出した生徒が 先生に<sup>に</sup> 見つけられた。 (孟 2011: 79,(1c))<sup>17</sup>

杉本(1991)によれば(13a)(13b)のように通常、他動詞文を自動詞文にする際に、統合価が一つ減少するが、受動詞では(14a)(14b)及び(14d)(14e)のように、自動詞文にしても統合価が減少せず、他動詞文においてガ格で示される動作主が二格で標示されることになるという。つまり、受動詞は構文的に「～ラレル」を用いた受動文と類似した形式になる特性を持つことになる。なお、受動詞には、上記のように、構文上ヲ格が出てこない、自動詞としての側面を持つものがある一方で、〈教わる〉〈授かる〉〈預かる〉<sup>18</sup>等のように、他動詞的な側面を持つものも存在するとされている。

(15) 他動詞的な受動詞

- a. 太郎が<sup>が</sup> 花子に 宿題を 教えた。 (杉本 1991:244,(61a))  
b. 花子が 太郎に<sup>に</sup> 宿題を 教わった。 (杉本 1991:244,(61b))  
c. 帝が<sup>が</sup> 平清盛に 官位を 授けた。  
d. 平清盛が 帝(に/から) 官位を 授かった。

<sup>17</sup> 孟(2011)は、(14a)～(14e)までの例文を引用し、更に、(14f)を追加して、受動詞の特質について議論を行っている。

<sup>18</sup> 〈預かる〉は孟(2011)によって新たに加えられた受動詞である。

- e. 太郎が 花子に 鍵を 預けた。  
 f. 花子が 太郎 (に/から) 鍵を 預かった。

(15b) (15d) (15f) のように〈教わる〉、〈授かる〉、〈預かる〉は、それぞれ「宿題を」、「官位を」、「鍵を」というヲ格で標示される直接目的語を取るため、(14) で見た動詞とは異なり、他動詞的な側面を持つと考えられる。しかし、それぞれ対応する動詞である〈教える〉(=15a)、〈授ける〉(=15c)、〈預ける〉(=15e) においてガ格で標示されている動作主が、〈教わる〉〈授かる〉〈預かる〉では、ニ格（もしくはカラ格）<sup>19</sup>で標示されるため、(14) で見た動詞と同様に受動詞の一部であると言うことができる。

接辞 {-ar-} を含む他動詞的な受動詞と対応する {-e-} 型他動詞の初出年代の関係を同様に調査したところ、(16) のようになった。尚、ここでの動詞対は、孟(2011)の受動詞の一覧の中で、接辞 {-ar-} を含むものを抜き出したものである。

(16) 他動詞的な受動詞の初出年代

{-ar-} 型他受動詞				{-e-} 型他動詞		
口語形	文語形	分類	初出年代	口語形	文語形	初出年代
預かる	†預かる	受	935『土佐日記』 <sup>20</sup>	預ける	†預く	830『東大寺諷誦文平安初期点』
教わる	†教はる	受	1804『洒落本・傾城買杓子規』	教える	†教ふ	720『日本書紀』
ことづ言付かる	†言付かる	受	1520『中華若木詩抄』	ことづ言付ける	†言付く	10C前『塗籠本伊勢物語』
授かる	†授かる	受	1600『どちりなきりしたん』	授ける	†授く	720『日本書紀』

<sup>19</sup> 杉本(1991)は、他動詞的な受動詞ではニ格がカラ格と交替することがあることを指摘している。杉本(1991)によれば通常、受動詞文においてニ格で標示される要素は有情物である必要があるが、カラ格で標示される場合は、無情物でも許容量が挙がるという。

- (ii) a. その銀行が 山田さんに お金を 貸した。 (杉本 1991:247,(71a))  
 b. ?山田さんが その銀行に お金を 借りた。 (杉本 1991:247,(71b))  
 c. 山田さんが その銀行から お金を 借りた。 (杉本 1991:247,(71c))

<sup>20</sup> ここでの初出の意味は「人の身柄や、金品、物事などを引き受けて守る。物事を任されて保管、管理する。」である。「関係する。関わる。参与する」（「与る」）という意味の初出年代は772『続日本紀』になっている。

(16) から分かるように、他動詞的な受動詞も対応する動詞に対して、初出年代が遅れやすいことが分かる。つまり、{-ar-} という接辞を持つ受動詞類は、自動詞的な側面を持つもの、他動詞的な側面を持つもの双方において、対応する動詞に対して遅れて生まれてくる傾向があると言える。

ここまで、「自動詞が遅れて生まれてくる自他對」における、現代語の自動詞の意味や文法的な特徴に基いた分類について、それぞれ用例を参照しながら分析してきたが、これらの動詞には相対的に、対象となる名詞句が無情物になるもの、もしくは有情物であっても事象が成立するために対象の意志が働かないものが多く含まれている。例えば「物体の変化を表す動詞類」に分類される〈混ざる〉という動詞は、(9b)において対象が「卵」という无情物になっているが、「\*太郎が混ざる」のように有情物を対象とした文は、通常許容されない。また、「事象の変化を表す動詞類」に分類される〈始まる〉という動詞も(10b)の例において、「日露戦争」という无情物として考えられる事象名詞を取っているが、「\*太郎が始まる」のように、有情物を対象とすることは通常は出来ない。「付着の意味を表す動詞類」に分類される〈植わる〉という動詞においても、(11b)において「桜の大木」という无情物を対象に取っているが、「\*太郎が植わる」のように有情物を「植わる」対象とすることは通常想定されない<sup>21</sup>。

「可能を表す動詞類」に分類される〈助かる〉〈儲かる〉は、「太郎が助かる」「花子が儲かる」のように有情物を対象に取ることも想定されるが、これらの動詞が表す事象は通常、対象の意志によって成立するものとは限らない。「太郎が(助かりたい)」「(花子が)儲かりたい」という意志を持つことと、実際に「助かる」こと、「儲かる」ことは直接的に関係しておらず、意志に反して「助からない」「儲からない」ことも十分に想定される。「助かる」「儲かる」という事象は対象である「太郎」「花子」によってコントロール出来るものではないと考えられる。

同様に、受動詞類に分類される〈捕まる〉〈見つかる〉も、(14b)(14e)において、対象となる「泥棒」「家出した生徒」は自らの意志によって「捕まった」「見つかつ

<sup>21</sup> 〈泊まる〉〈横たわる〉〈籠る〉等、有情物を対象に取ることが出来る動詞も含まれているため、「自動詞が遅れて生まれてくる自對」であることが、必ずしも対象となる名詞句に无情物を取るとは限らない。

- (iii) a. 田山花袋が泊まったのは、当時の木賃宿ですね。(松本健一『知の記憶をあるく』)  
 b. ハーマイオニーが医務室に横たわっている。  
 (J.K. ローリング作/松岡佑子訳『ハリー・ポッターと不死鳥の騎士団』)  
 c. 雪洋が大学の研究室にこもっていたのは、満更マズイ手ではなかったらしい。  
 (水原とほる『糞冬』)

た」という状態になったとは考えにくい。杉本 (1991) でも、受動詞文では「意志に反して」というニュアンスが出やすいことが指摘されており、通常は対象となる名詞句の意志は関与しないものと考えられる。

また、このことは自動詞が表す事象が成立するために、何らかの外的な力が必要になることを示唆していると考えられる。例えば「物体の変化を表す動詞類」に分類される〈茹だる〉 (=9c) という動詞では、対象に当たる「蕎麦」が自らの性質によって「茹だった」状態になることは通常想定されず、誰かの「蕎麦を茹でる」という行為が必要になると考えられる。また、「事象の変化を表す動詞類」に分類される〈決まる〉 (=10a) という動詞においても「（結婚することを）決める」人物の存在なしに「結婚すること」が決定されることはまずない。更に「付着の意味を表す動詞類」に相当する〈植わる〉 (=11b) という動詞でも、影山 (1996) が「脱使役的」とするのように、「（誰かが桜の大木）を植える」という行為が前提となっており、「桜の大木」が自らの性質によって「植わった」状態になることはないと推測される。

「可能の意味を表す動詞類」では、前述したように対象となる名詞句の意志や性質によって事象が成立することは考えにくく、その時の環境など、外的な要因が働く必要があると考えられる。また、受動詞類においても、二格によって標示される動作主の行為なくして、対象が「捕まった」状態 (=14b) や、「見つかった」状態 (=14c) になることはないと考えられる。

以上見てきたように、「自動詞が遅れて生まれてくる自他對」において {-ar-} 型自動詞は、典型的には、対象自らの性質により変化が起これるのではなく、何らかの外的な力が対象に働くことによって、初めて変化が起これるものが多いと言える。

### 3.2. 初出年代にそれほど差が見られない自他對

前節では「自動詞が遅れて生まれてくる自他對」の性質について観察した。本節では、「初出年代にそれほど差が見られない自他對」について詳しく見ていくこととする。(17) は『日本国語大辞典 精選版』における、動詞の初出年代を比較した際に、一方の形式が生まれてから、もう一方の形式が生まれるまでの期間が 100 年以内のもの、もしくは両者とも上代において既に出現していたものである。(8) で示した表と同様に、表の網掛け部は現代語において自動詞と他動詞の対応が希薄と考えられるものを示している。前節と同様に、これらの動詞対について筆者の内省に基づき、現代語の自動詞の意味や文法的な性質から表の 3 列目（「分類」）のように、大まかな分類を行った。

## (17) 初出年代にそれほど差が見られない自他对

自動詞形				他動詞形		
口語形	文語形	分類	初出年代	口語形	文語形	初出年代
おぶさる	おぶさる	位/付	1785『雑俳・菟姑柳』	おぶう	おぶう	1770『洒落本・南江駅話』
くぐもる	くぐもる	状(物)	720『日本書紀』	くくむ	くくむ	720『日本書紀』
積もる	積もる	付	8C後『万葉集』	積む	積む	720『日本書紀』
ふさがる	ふさがる	状/付	720『日本書紀』	ふさぐ	ふさぐ	720『日本書紀』
上がる (挙がる/揚がる)	上がる	位	720『日本書紀』	上げる (挙げる/揚げる)	上ぐ	712『古事記』
当たる	当たる	位/付	720『日本書紀』	当てる	当つ	712『古事記』
集まる	集まる	位	753『仏足石歌』	集める	集む	720『日本書紀』
改まる	改まる	状(事)	8C後『万葉集』	改める	改む	795『類聚国史』七五・歳次六・曲宴・延暦一四年四月十一日
治まる	治まる	状(事)	720『日本書紀』 <sup>22</sup>	治める	治む	720『日本書紀』 <sup>23</sup>
終わる	終はる	状(事)	8C後『万葉集』	終える	終ふ	720『日本書紀』
掛かる (架かる/懸る)	掛かる	付	720『日本書紀』	掛ける (架ける/懸ける)	掛く	712『古事記』
重なる	重なる	付	720『日本書紀』	重ねる	重ね	720『日本書紀』
絡まる	絡まる	付	8C後『万葉集』	絡める	絡む	720『日本書紀』
代わる (換わる/替わる)	代はる	状(物)	8C後『万葉集』 <sup>24</sup>	代える (換える/替わる)	代ふ	720『日本書紀』 <sup>25</sup>
変わる	変はる	状(事/物)	8C後『万葉集』 <sup>26</sup>	変える	変ふ	858『大智度論天安二年点』 <sup>27</sup>
極まる	極まる	状(事)	9C末-10C初『竹取物語』	極める	極む	883『地藏十輪経元慶七年点』
くすぶる	くすぶる	状(物)	1777-81『色葉字類抄』	くすべる	くすぶ	1687『浮世草子・武道伝来期』

<sup>22</sup> ここでの初出の意味は「乱れや騒ぎなどがしずまる。平穏な状態になる。平和が保たれる。」である。

<sup>23</sup> ここでの初出の意味は「主導者として国の政治をとる。国民や国土を統率・制御する」である。

<sup>24</sup> ここでの初出の意味は「あるものが退いて、その位置・立場に他の物が来る。交替する。」である。

<sup>25</sup> ここでの初出の意味は「前からあるものや、決まっているものをやめて、新しく別の物にする。とりかえる。交代させる。また、あるものの役目を他のものにさせる。代理をさせる。」である。

<sup>26</sup> ここでの初出の意味は「物事の状態や質が、前と別のものになる。変化する。」/「年月などが改まる、また新しくなる。」である。

<sup>27</sup> ここでの初出の意味は「居場所、置き場所などを別の所にする。移す。」である。「物事の状態や質を、前と別の物にする。変化させる。」という意味の初出は 9C末-10C初『竹取物語』である。

{-ar-} 型自動詞と、対応する他動詞の派生関係について（関口雄基）

くるまる	†くるまる	付	室町末『御伽草子・源藏人物語』	くるめる <sup>28</sup>	†くるむ	室町中『文明本節用集』
加わる	†加はる	位	720『日本書紀』	加える	†加ふ	720『日本書紀』
籠る	†籠る	付	720『日本書紀』	込める	†込む	8C後『万葉集』
下がる	†下がる	位	8C後『万葉集』	下げる	†下ぐ	7C後-8C『催馬楽』
定まる	†定まる	位 / 状 (事)	720『日本書紀』	定める	†定む	712『古事記』
さわる 障る	†障はる	状(物)	720『日本書紀』	さ 障える	†障ふ	8C後『万葉集』
静まる (鎮まる)	†静まる	状(事)	720『日本書紀』	静める (鎮める)	†静む	8C後『万葉集』
迫る	†迫る	位	720『日本書紀』	攻める	†攻む	732-739『肥前風土記』
備わる	†備はる	付	830『西大寺本金光明最勝王経平安初期点』	備える	†備ふ	757『続日本紀』
染まる	†染まる	状(物)	720『日本書紀』	染める	†染む	8C後『万葉集』
携わる	†携はる	付	8C後『万葉集』	携える	†携ふ	720『日本書紀』
溜まる (貯まる)	†溜まる	付	712『古事記』	溜める (貯まる)	†溜む	8C後『万葉集』
伝わる	†伝はる	位	850『大唐三藏玄奘法師表啓平安初期点』	伝える	†伝ふ	810-24『靈異記』
つながる	†つながる	付	1800『洒落本・西遊記』	つなげる	†つなぐ	1813-23『滑稽本・浮世床』
とどまる	†とどまる	位	720『日本書紀』	とどめる	†とどむ	8C後『万葉集』
止まる	†止まる	位	8C後『万葉集』	止める	†止む	8C後『万葉集』
のっかる	†のっかる	位/付	1885-86《坪内逍遙》『当世書生気質』	のっける	†のっける	1886《坪内逍遙》『内地雑居未来之夢』
潜まる	†潜まる	位 / 状 (事)	935『土佐日記』	潜める	†潜む	1001-14『源氏物語』
ぶつかる	†ぶつかる	付/位	1859『歌舞伎・小袖曾我薊色縫(十六夜清心)』	ぶつける	†ぶつく	1903《国木田独歩》『別天地』
隔たる	†隔たる	状(物事)	8C後『万葉集』	隔てる	†隔つ	8C後『万葉集』
曲がる	†曲がる	状(物事)/位	720『日本書紀』	曲げる	†曲ぐ	720『日本書紀』
またがる	†またがる	位	720『日本書紀』	またぐ	†またぐ	800年頃『一字頂輪王儀軌音義』 <sup>29</sup>

<sup>28</sup> 元の表には掲載されていないが、〈くるまる〉には〈くるめる〉という下二段活用の他動詞（母音語幹動詞）だけではなく、〈くるむ〉という四段活用の他動詞（子音語幹動詞）も対応する（cf 須賀 1980）。〈くるむ〉の初出年代は、〈くるまる〉と同じ、室町末『御伽草子・源藏人物語』になっている。

<sup>29</sup> ここでの初出年代は、母音語幹動詞〈またぐ〉のものである。現代のような子音語幹動詞〈またぐ〉の初出年代は1690『俳諧・其袋』になっている。

まつわる	†まつわる	付	720『日本書紀』	まとう	†まつう	810『小川本願経四分律平安初期点』 <sup>30</sup>
交わる	†交はる	状(物)	720『日本書紀』	交える	†交ふ	720『日本書紀』
休まる	†休まる	可	771『続日本紀』	休める	†休む	720『日本書紀』

(位:位置変化を表す動詞類、状:状態変化を表す動詞類(物:主として物体の変化を表すもの、事:主として事象の変化を表すもの)、付:付着の意味を表す動詞類、可:可能の意味を表す動詞類)

こちらでも動詞自体が多義である場合があるため、一つの動詞の意味が複数のカテゴリーに跨ることもあり、統一的に分類することは難しいが、(17)の表から「初出年代にそれほど差が見られない自他對」には、「自動詞が遅れて生まれてくる自他對」には見られなかった、「位置変化を表す動詞類」(「位」)が多く含まれていることが分かる。(18)は、NLBにおいて出現する、「位置変化を表す動詞類」の用例の一部である。

#### (18)位置変化を表す動詞類

- a. 王さまは、ゾウのせなかにおぶさりました。  
(福永令三『クレヨン王国王様のへんな足』)
- b. ぼくたちは、三階に上がった。  
(はばしげる『空とぶじゅうたん、なぞの計画』)
- c. そこで全国から蘭学を学ぶ人が長崎に集まったのであった。  
(酒井シズ『絵で読む江戸の病と養生』)
- d. 碑文谷二丁目の信号から見当をつけて、千春は左へ曲った。  
(夏樹静子『訃報は午後二時に届く』)
- e. 苦肉の策として千重子がメンバーに加わることになった。  
(吉川潮『わが愛しの芸人たち』)

例えば(18a)に挙げた〈おぶさる〉という動詞は、「王さま」が「ゾウのせなか」という場所に移動することで、「おぶさる」という状態に変化するという事象を表している。また、(18b)の〈上がる〉という動詞も、「ぼくたち」が、元の位置から「三階」という場所に移動する事象を表していると解釈することが出来る。更に、(18c)に挙げ

<sup>30</sup>元の表では〈まとう〉という形で掲載されているが、元々は〈まつう〉という形態であったため、ここでは〈まつう〉の初出年代を出している。なお、〈まとう〉という形態の初出年代は970-999『宇津保物語』である。

た〈集まる〉や(18d)に挙げた〈曲がる〉も、それぞれ対象となる「蘭学を学ぶ人」や「千春」が、「長崎」や、「左」の方向に位置変化することを表していると考えられる。

また、(17)の表において「状(物)」「状(事)」「付」としたものは、それぞれ前節で述べた「物体の変化を表す動詞類」「事象の変化を表す動詞類」及び「付着の意味を表す動詞類」に相当する動詞の類である。これらの動詞は「自動詞が遅れて生まれてくる自他對」同様に、「初出年代にそれほど差が見られない自他對」にも多く見られるものである。(19)~(21)に NLB において出現する、これらの動詞の用例の一部を示す。

#### (19) 物体の変化を表す動詞類

- a. 東の空が茜色に染まり、上空の闇もうすれて青みが増してきていた。  
(鳥羽亮『妖剣おぼろ返し』)
- b. 立ち上る黒々とした煙に包まれた街は、まるで戦争があつて爆撃にでもあつたかの様相を呈していて、こんなものが折れるはずがない、と思っていた高架橋のコンクリートでできた支柱が根元近くで折れ曲がり、中の鉄筋が飴細工のようにグニャッと曲がってコンクリートを突き破って露になってしまつていたり、と全く想像すらできない現実の光景が画面から流れてきていました。  
(藤田益啓『心のカベ、崩壊』)

#### (20) 事象の変化を表す動詞類

- a. 季節は巡り、年が改まつた。  
(石川文康『そば往生』)
- b. しかし短い北国の夏が終り、ライマンの帰京がいよいよ間近になるころ、黒田は名案を思いついていた。  
(森本貞子『秋霖譜』)
- c. 現に参院選の翌年、リクルート事件などの騒ぎがひとまず静まつたなかで行われた平成2年2月の衆院総選挙では自民党の方が圧勝し、「参院選では悪い条件が重なつた」という自民党の言い分を一応裏づけた結果になりました。  
(日本経済新聞社編『ベーシック/税金問題入門』)
- d. あと15分で日付が変わります。  
(Yahoo!知恵袋)

#### (21) 付着の意味を表す動詞類

- a. ピアスは1年ぐらいつけっぱなしにしておかないと穴がふさがると聞いたので、はずせません。  
(Yahoo!知恵袋)

- b. このとき、死体を縛っていたロープは既に解けていて、ラズプーチンの腕が伸びていたと報告され、また検屍の結果も、肺に水が溜まっていたので、川に放り込まれた時点ではまだ生きていたと推定された。

(石田敦士『歩いて書いたヨーロッパの歴史』)

- c. 赤レンガにツタがからまり、尖塔に鐘をいただく教会風のたたずまいはクリスチャンだった礫山にちなむもの。(『オレンジページ』)

- d. 博士はそのランプのわきに毛布にくるまって座っていた。

(村上春樹『世界の終りとハードボイルド・ワンダーランド』)

尚、〈曲がる〉という動詞は、前述したように「位置変化動詞類」としての機能を持つ一方で、(19b)のように、「鉄筋」自体が本来の形状を失い、まっすぐではない状態に変化するという「状態変化動詞類」としての側面を持つと考えられる。

ここまで「初出年代にそれほど差が見られない自他對」に見られる動詞の類型について見てきたが、これらの動詞は「自動詞が遅れて生まれてくる自他對」に比べて、自動詞文の主語(対象となる名詞句)に有情物を取りやすい傾向があると考えられる。特に「位置変化を表す動詞類」は(18)で示したように、「王さま」(=(18a))、「ぼくたち」(=(18b))、「蘭学を学ぶ人」(=(18c))、「千春」(=(18d))、「千重子」(=(18e))のように、自動詞文の主語(対象となる名詞句)に有情物を取ることが出来る。

また、「初出年代にそれほど差が見られない自他對」に含まれる{-ar-}型自動詞が表す事象は、対象となるもの自らの性質によって成立することが想定され得るものが多い。例えば「物体の変化を表す動詞類」に分類される〈染まる〉という動詞は、(19a)において、対象に「東の空」という名詞を取っている。「東の空が茜色に染まる」という事象は通常、自然現象であり、対象自らの性質による変化として捉えることが出来る。また、「事象の変化を表す動詞類」に分類される〈改まる〉(=(20a))、〈終わる〉(=(20b))、〈静まる〉(=(20c))、〈変わる〉(=(20d))という動詞も、上記の用例ではそれぞれ「年」、「夏」、「騒ぎ」、「日付」という名詞を対象に取っており、これらは外からの力を必要とせず、自らの性質によって自然発生的に変化するものであると解釈される。

更に(21)に挙げた「付着の意味を表す動詞類」においても、「(ピアスの)穴が塞がる」(=(21a))、「水が溜まる」(=(21b))、「ツタが絡まる」(=(21c))、「博士が毛布にくるまる」(=(21d))という事象は、それぞれ対象に相当する「(ピアスの)

穴」 (=21a)、「水」 (=21b)、「ツタ」 (=21c)、そして「博士」 (=21d)の性質、もしくは意志によるものと考えることが出来、必ずしも外的な力によって起こるものではないと推測される。前述した「位置変化動詞類」も、典型的には移動主体である有情物の意志によって事象が成立すると解釈されるため、外力の存在は必ずしも想定されるものでない。

更に、「自動詞が遅れて生まれてくる自他對」に見られていた「可能の意味を表す動詞類」や受動詞類は、この動詞群にはあまり見られない<sup>31</sup>。前節で見たように、これらの動詞は、基本的に対象自らの性質によって事象が成立することは想定し難く、何らかの外的な力が作用する必要があると考えられる。これらの動詞があまり見られないことも「初出年代にそれほど差が見られない自他對」の特徴の一つとして位置づけることが出来るだろう。このように、「初出年代にそれほど差が見られない自對」では、自動詞が表す事象が外力を必要とせず、対象の内的な性質や意志によって成立することが想定しやすいと考えられる。

### 3.3. 他動詞が遅れて生まれてくる自對

本節では、「他動詞が遅れて生まれてくる自對」について見ていくこととする。(22)は、『日本国語大辞典 精選版』において初出年代を比較した際に、他動詞形が自動詞形に対して100年以上遅れて生まれてくる自對である。(8)(17)の表と同様に、表の網掛け部分は現代語において自動詞と他動詞の対応が希薄と考えられるものを表している。また、これらの動詞についても筆者の内省に基づき、表の3列目（「分類欄」）のように、現代語の自動詞の意味や文法的な機能から大まかな分類を行った。

---

<sup>31</sup> 〈休まる〉は、「可能の意味を表す動詞類」と考えられるが、「初出年代にそれほど差が見られない自對」に含まれている。しかしながら〈休まる〉は、他の「可能を表す動詞」に比べて、対象の性質によって事象が成立することを想定しやすいと推測される。

(iv) 空蟬と一緒にいると、なぜかとても心が休まる気がするのだ。（柴田よしき『宙都』）

例えば、上記の例では対象である「心」の性質によって、「休まる」という状態になったと考えることが出来る。〈休まる〉は、〈助かる〉〈儲かる〉〈勤まる〉等、他の動詞に比べて「対象自らの性質によって、そのような状態になることが出来た」という解釈が生じやすくなると考えられる。

## (22) 他動詞が遅れて生まれてくる自他対

自動詞形				他動詞形		
口語形	文語形	分類	初出年代	口語形	文語形	初出年代
はさまる	はさまる	付	720『日本書紀』	はさむ	はさむ	950『石山寺本法華厳玄贊平安中期点』
つづまる	つづまる	状(物)	830『東大寺願桶文平安初期点』	つづめる	つづむ	974『蜻蛉日記』
連なる	連なる	位	720『日本書紀』	連ねる	連ぬ	830『西大寺本金光明最勝王経平安初期点』
遠ざかる	遠ざかる	位	720『日本書紀』	遠ざける	遠ざく	1022『大日経治安二年点』

(位:位置変化を表す動詞類、状:状態変化を表す動詞類(物:主として物体の変化を表すもの、事:主として事象の変化を表すもの)、付:付着の意味を表す動詞類、可:可能の意味を表す動詞類)

これらの語は、いわゆる逆成 (back formation) による語と見られ、他の語群と比べると、動詞の数は少ない。これらの自他対は、「位置変化を表す動詞類」「付着の意味を表す動詞類」「物体の変化を表す動詞類」で構成されており、「自動詞が遅れて生まれてくる自他対」に見られる、「可能の意味を表す動詞類」や受動詞類は存在しない。(23)はNLBにおいて出現する、これらの動詞の用例の一部である。

## (23) 他動詞が遅れて生まれてくる自他対

- a. 北京の大通りを行く趙丹の葬列には、車が百台以上もつらなった。  
(石子順『中国明星物語』)
- b. 関守は、車がゆっくり遠ざかるのを見送って暗い海に視線を向けた。  
(西村寿行『遠い渚』)
- c. この付近の地層は風化した泥岩層ですが、所々に白っぽい色をした薄い地層が挟まります。  
(静岡の自然をたずねて編集委員会編『静岡の自然をたずねて』)
- d. 母はそんな夫と姑との間に挟まって、相談する相手もないまま苦悩を深めていったのだろう。  
(『小説新潮』)
- e. かざしとは髪挿しのつづまったことばである。  
(清川妙『出会いのときめき』)

(23a)の〈連なる〉と(23b)の〈遠ざかる〉は「位置変化を表す動詞類」に相当すると考えられるものである。ここでの用例において「車が連なる」「車が遠ざかる」という事象は、外的な要因によるものではなく、「車」自体が持つ性質によるものと解釈

することが出来る。また、「付着の意味を表す動詞類」に分類される（挟まる）も、(23d)において、「母」という「挟まる」対象の性質によって、「夫」と「姑」という二つの事物の間に入り込むことになったと考えられる。更に、現代語ではあまり使用されないが<sup>32</sup>〈約まる〉という動詞も、(23e)において、何らかの外的な作用によって、「髪挿し」という語が短縮された状態になったとは想像し難く、対象自らの性質による変化であると考えられる。このように、「他動詞が遅れて生まれてくる自他對」は「初出年代にそれほど差が見られない自他對」と同様に、外的な力を必ずしも必要とせず、対象の性質によって変化することが出来る動詞が多くなると考えられる。

#### 4. 形容詞派生動詞

第3節では、形容詞派生動詞以外の {-ar-} 型自動詞を含む自他對の派生関係と、文法的な特質について分析を行った。『日本国語大辞典 精選版』の初出年代を比較した際に、「自動詞が遅れて生まれてくる自對」は、相対的に受動詞類や「可能の意味を表す動詞類」が多く含まれるのに対して、「初出年代にそれほど差が見られない自對」や「他動詞が遅れて生まれてくる自對」は、「位置変化を表す動詞類」が多く含まれる。また、「自動詞が遅れて生まれてくる自對」は、自動詞の主語（対象となる名詞句）が無情物、もしくは意志を伴わない有情物になるものが多く、自動詞が表す事象が成立するために、人為的な要因や、自然的な要因など、何かしらの外力が必要となる傾向がある一方で、「初出年代にそれほど差が見られない自對」や「他動詞が遅れて生まれてくる自對」では、自動詞の主語（対象となる名詞句）に有情物を取るものが多く、対象に備わっている性質や意志によって、自動詞が表す事象が成立することが出来る場合が多いと考えられる。ここまで見てきた自對では、凡そ派生パターンの違いと事象が成立するために外力を必要とするか否かという点において関連が見られた。影山 (1996) 等で論じられている、使役主（動作主）の行為等を受けた対象の状態変化を表すという、{-ar-} 型自動詞の特性は主に「自動詞が遅れて生まれてくる自對」において当てはまるものと推測される。「初出年代にそれほど差が見られない自對」や「他動詞が遅れて生まれてくる自對」は自然発生的な変化や自律的な変化を表す動詞が多く含まれるため必ずしも、影山 (1996) が指摘する形態と意味の一致には相当しないと考えられよう。

<sup>32</sup> NLB 及び BCCWJ（中納言）で検索した際に〈約まる〉は、6例しかヒットしない。

しかしながら、同じ {-ar-} 型という形態を持ちながら、〈弱める〉 vs. 〈弱まる〉、〈固める〉 vs. 〈固まる〉のような形容詞派生動詞では、派生のパターンに依らず、総じて対象そのものの性質による自然発生的な解釈が生じてくる。

(24) 自然発生的な意味を持った形容詞派生動詞

- a. 風が弱まった。 (影山 1996:182,(94b))
- b. コンクリートが固まった。 (影山 1996:182,(95b))
- c. 八月が過ぎ、九、十月と秋が深まるにつれて、昼の時間もしだいに短くなる。 (小林英起子『ケルン大聖堂の見える街』)

影山 (1996) によれば、形容詞派生動詞は形態と意味が一致しない動詞の例であり、いわゆる「脱使役化」の例外に当たる自他対であるという。形容詞派生動詞は、他の {-ar-} 型自動詞とは異なった性質を持っていると推測される。本節では、このような形容詞派生動詞の自他対について分析を行うことにする。

#### 4.1. 形容詞派生動詞の特殊性について (杉岡 2002)

杉岡 (2002) は、〈暖める〉 vs. 〈暖まる〉、〈深める〉 vs. 〈深まる〉のような形容詞派生動詞の自他対の特性について、英語と比較しながら分析を行っている。杉岡 (2002) によれば、英語において形容詞から派生した動詞は、他動詞のみの用法のものか、自他両方の用法を持つものに限られ、自動詞のみの用法を持つものは殆ど存在しないという。このことから、杉岡(2000)は、基本的に形容詞派生動詞の自他対において、他動詞がベースになっており、自動詞はそこから派生したものであるという見解を示している。また、杉岡 (2002) は、日英語において、典型的な自他対における自動詞は非対格動詞になることが多く、通常何らかの状態になるという終結点を持っているが、形容詞派生動詞の自他対における自動詞は終結点が設定されず、ある状態に向けた段階的な変化を表す性質 (degree achievement) があると指摘している。

Degree achievement という性質は、DOWTY (1979) によって提唱されたものであり、通常は \*Ken arrived home for two hours. (杉岡 2002: 99,(17a)) のように、継続を表す時間副詞とは共起しにくいとされる到達動詞 (achievement verb) が to cool、to sink のような動詞では、(25) のように、継続を表す時間副詞句と共起することが出来、段階的にある状態に向かっていく様子を表すことによって示されるものである。

(25) 継続を表す時間副詞と共起する到達動詞の存在 (DOWTY 1979)

- a. The soup cooled for ten minutes. (DOWTY 1979: 88, (94))  
 b. The ship sank for an hour (before going under completely). (DOWTY 1979: 88, (95))

森山 (1988) は、このような段階的な変化を表す性質を「進展性」と命名し、「過程を持つ動きであると同時に、その過程において変化が漸次的に進むという意味」(森山 1988: 147) と定義している。これは変化(動き)の過程の中で、主体もしくは客体が一時点的な変化をしていくことを表すものとして位置づけられる<sup>33</sup>。

杉岡 (2002) によれば、(25a) のように継続的な時間副詞と共起出来ることに加え、①段階的な変化の途上の一時的な属性を表すことは出来るが、恒常的な属性は表すことが出来ないこと (=26)、②「～ている」形式において「結果残存」のみならず「進行中」の解釈が可能になること (=27) からも、形容詞派生動詞が段階的な程度変化 (degree achievement) の性質を持つことが示唆されるという。

(26) 一時的な属性は表せるが、恒常的な属性は表せない

- a. Eng. smart (adj): Jap. 「格好良い」 / 「頭がいい」  
     α. to smarten 「格好良くする、なる」 (一時的)  
     β. to smarten 「\*頭がよくなる」 (恒常的) (杉岡 2002: 98)  
 b. Jap. 高い (adj)  
     α. 気温が高まる (一時的)  
     β. \*背が高まる (恒常的) (杉岡 2002: 104)

(27) 「-ている」形式が「結果残存」の解釈のみならず「進行中」の解釈も許容する

- a. 風が弱まっている。 (進行中/結果状態)  
 b. 闇が深まっている。 (進行中/結果状態)  
 c. 台風の雨足が強まっている。 (進行中/結果状態)  
 (杉岡 2002:107, (35))

更に杉岡 (2002) は、前節でも触れたように、形容詞派生動詞の自他対において、自動詞の表す状態変化が自律的になることを、影山 (1996) を引き継ぐ形で主張している。

<sup>33</sup> 森山 (1988) は、動きが運動として展開している時間(過程) ab の間に、主体の一時点的な変化 s、もしくは客体の一時点的な変化 o を挟み、asb、aob とすることで「だんだん(次第に)～してくる/だんだん～していく/～しつつある」という段階的な変化を示している。

(28) 形容詞派生動詞における自律的变化

- a. Her dress shortened. (杉岡 2002:100,(21a); 影山 1996: 170, (70c))
- b. \* Her skirt lengthened. (杉岡 2002:100,(21b); 影山 1996: 170, (70d))
- c. The waiting line lengthened. (杉岡 2002:100,(21b); 影山 1996: 170, (70d))

杉岡 (2002) 及び影山 (1996) によれば、例えば、(28a) のように、「ドレスが短くなった」のような自然発生的な事象の場合は、形容詞派生動詞 *to shorten* を用いることが出来るが、(28b) のように、「スカートが長くなった」のような、外的な作用が無ければ成立しない事象の場合は、形容詞派生動詞 *to lengthen* を使用することが出来ないという。一方で、杉岡 (2002)、影山 (1996) は、(28c) のように「列が長くなった」のような自然発生的な事象を表す場合は、*to lengthen* を使用することが出来るとしている。

杉岡 (2002) は、日本語では (29) のように他動詞文と対応し、自動詞文が外的な力が作用することによって成立する事象を描く場合もある一方で<sup>34</sup>、(30) のように、通常他動詞文とは対応せず、外的な作用を必要としない自律的、自然発生的な事象を描く場合もあることを指摘している。

- (29) a. 明子はストーブで体を暖めた。 (杉岡 2002: 104,(26a))
- b. ストーブで体が暖まった。 (杉岡 2002: 104,(26b))
- c. 県は河岸工事をして、川幅を狭めた。 (杉岡 2002: 104,(27a))
- d. 河岸工事の結果、川幅が狭まった。 (杉岡 2002: 104,(27b))
- e. 部長が会議の日程を早めた。 (杉岡 2002: 104,(28a))
- f. 部長の提案で会議の日程が早まった。 (杉岡 2002: 105,(28b))
- (30) a. \*太陽が風を弱めた。 (杉岡 2002: 107,(34a))

---

<sup>34</sup> 杉岡 (2002) は、この様な対応の場合、影山 (1996) が指摘するような脱使役的な語彙概念構造を持つとしているが、ここで挙げられている〈暖まる〉〈狭まる〉〈早まる〉という動詞も、(v) のように、使役主が想定されず、自然発生的な文脈で使用されることもあるため、必ずしも、影山 (1996) が指摘するような「脱使役化」には相当しないと考えられる。

- (v) a. 夜になるとすばまるので夜目にはただの枯れ芝だが、陽がのぼって空気があたたまると黄色い花が点々と開く。 (坂上弘『近くて遠い旅』)
- b. 大海嘯といって、海の潮の干満の差と、急激に川幅がせばまる錢塘江の特異な地形が作用して起きる現象だった。 (井上裕美子『臨安水滸伝』)
- c. 日没時間が早まる秋から冬にかけて、交通事故の多発が懸念されます。 (『広報たかまつ』)

- b. 風が弱まった。 (杉岡 2002: 107,(34a))
- c. \*彼はローソクを消して闇を深めた。 (杉岡 2002: 107,(34b))
- d. 太陽が沈んで闇が深まった。 (杉岡 2002: 107,(34b))
- e. \*台風の接近が雨足を強めた。 (杉岡 2002: 107,(34c))
- f. 台風の接近で雨足が強まった。 (杉岡 2002: 107,(34c))

杉岡 (2002) によれば、(30) のような自然発生的な事象を表す形容詞派生の自動詞は {-ar-} という形態を持ちながら、影山 (1996) が指摘するような「脱使役」的な語彙概念構造を持っておらず、むしろ〈折れる〉〈割れる〉のような {-e-} 型自動詞に代表される「反使役」に近い語彙概念構造になるという<sup>35</sup>。また、このような形容詞派生の自動詞は (31b) (31d) のような、ガ格名詞句とヲ格名詞句が全体と部分の関係になっており、自発的な変化を描写する他動詞と対応関係を持つことから、自動詞と他動詞の関係は (32) のように一般化されるという。

(31) 自発的な変化を表す形容詞派生動詞の自他対応

- a. 台風の雨足が強まった。 b. 台風が雨足を強めた。 (杉岡 2002:110,(44))
  - c. 車輪の回転が速まっている。 d. 車輪が回転を速めている。
- (杉岡 2002: 111,(45))

(32) 自発的な変化を表す形容詞派生動詞の自他対応における語彙概念構造

- a. 自動詞文: [y CONTROL [y BECOME [y BE at- ([+Deg] State) ]]]  
(杉岡 2002: 109,(39a))
- b. 他動詞文: [x CONTROL [y BECOME [y BE at- ([+Deg] State) ]]]  
(杉岡 2002: 109,(39b))

---

<sup>35</sup> 杉岡 (2002) は、形容詞派生動詞が (vi a) のように命令形にすることが出来ることから、{-ar-} 型動詞の典型とされる脱使役化ではなく、{-e-} 型動詞の典型とされる反使役化に近いことを示している。

- (vi) a. 風はそのまま劫風のように無限に強まり、私もろとも金閣を倒壊させる兆候のように思われたのである。「強まれ! 強まれ! もっと疾 (はや) く! もっと力強く!  
(三島由紀夫『金閣寺』; 杉岡 2002: 107,(37))
- b. ロープよ、切れなideくれ!/しみよ、きれいに取れてくれ!/ひもよ、ほどけるな!  
(影山 1996: 190,(121))
- c. \*木よ、植われ!/\*絵よ、壁にうまく掛かれ!/\*本よ、箱にきちきちに詰まるな!  
(影山 1996: 190,(122))

(x-y: 全体-部分 (x: 変化の主体、y: xの属性・部分))

(32a)の自動詞文の語彙概念構造は、yという変化の対象が自分自身の性質によってコントロールされ、次第にある状態へ変化していくことを示している。一方で、(32b)の他動詞文の語彙概念構造は、使役主であるxと、変化の対象であるyが全体と部分の関係になっており、yが次第にある状態へと変化していくことによって、xも影響を受けるとい、いわば再帰的な構造になっているという。つまり、他動詞文においても使役主の存在によって対象が変化している訳ではなく、基本的に自動詞文と同じく自律的な変化を表していることになる。

以上述べたように、形容詞派生動詞の自他対には、総じて段階的な程度変化 (degree achievement) と変化の自律性という2つの大きな特質があり、動詞の派生を考える上でも、こうした特性を考慮して分析する必要があると推察される。

#### 4.2. 形容詞派生動詞の派生パターン

本節では、前節において紹介した杉岡 (2002) の論を踏まえ、歴史的な派生関係から、日本語の形容詞派生動詞の自他対について分析していくこととする。(33)は『日本国語大辞典 精選版』において自動詞形と他動詞形の初出年代を比較した際に、自動詞形が他動詞形に対して100年以上遅れて生まれてくる形容詞派生動詞の自他対である。一方で、(34)は『日本国語大辞典 精選版』において初出年代を比較した際に、自動詞形と他動詞形の差が100年以内のもの、もしくは両形式共に上代において既に出現していたものである。

#### (33) 自動詞が遅れて生まれてくる形容詞派生動詞の自他対

自動詞形				他動詞形		
口語形	文語形	分類	初出年代	口語形	文語形	初出年代
温まる	†温まる	形	897『千里集』	温める	†温む	720『日本書紀』
清まる	†清まる	形	1105『冥報記長治二年点』	清める	†清む	720『日本書紀』
狭まる	†狭まる	形	1792『詞葉新雅』	狭める	†狭む	1150『観智院本唐大和上東征伝院政期点』
高まる	†高まる	形	1892《樋口一葉》『うもれ木』	高める	†高む	948『漢書楊雄伝天曆二年点』
強まる	†強まる	形	1933《川端康成》『寝顔』	強める	†強む	1595『羅葡日辞書』
ぬく 温まる	ぬく †温まる	形	1896『龍潭潭』	ぬく 温める	ぬく †温む	1603-04『日葡辞書』

速まる (早まる)	†速まる	形	1120『今昔物語集』 <sup>36</sup>	速める (早める)	†速む	10C後『落窪物語』 <sup>37</sup>
低まる	†低まる	形	1896《泉鏡花》 『琵琶伝』	低める	†低む	1711『浮世草子・傾城禁短気』
広がる (拡がる)	†広がる	形	14C後『太平記』	広げる (拡げる)	†広ぐ	900『百法頭幽抄平安中期点』
広まる	†広まる	形	898-901『新撰字鏡』	広める	†広む	720『日本書紀』
深まる	†深まる	形	1922《有島武郎》 『星座』	深める	†深む	8C後『万葉集』
緩まる	†緩まる	形	1591『サントスの御作業』	緩める	†緩む	1223『海道記』
弱まる	†弱まる	形	1888-89《二葉亭四迷》訳『めぐりあひ』	弱める	†弱む	1477『史記抄』

(34) 初出年代にそれほど差が見られない形容詞派生動詞

自動詞形				他動詞形		
口語形	文語形	分類	初出年代	口語形	文語形	初出年代
薄まる <sup>38</sup>	†薄まる	形	1967《柏原兵三》 『徳山道助の帰郷』	薄める	†薄む	1909《森鴎外》『金貨』
丸まる	†丸まる	形	1527『三大詞幻雲抄』	丸める	†丸む	1477『史記抄』
固まる	†固まる	形	720『日本書紀』	固める	†固む	8C後『万葉集』

(33) 及び (34) の表から分かるように、形容詞派生動詞の自他対は、他動詞形に対して自動詞形が遅れて生まれてくるものが圧倒的に多い。今回の調査の範囲からは、一部の例外を除いて他動詞が遅れて生まれてくる形容詞派生動詞は基本的には存在しない

<sup>36</sup> ここでの初出年代の意味は「度を過ごして早くする。急ぎすぎる。多く、あわてたり、あせったりして、判断を誤り、軽はずみなことをすることにする。」である。「時期が早くなる。速度が速くなる。」の初出年代は1603-04『日葡辞書』である。

<sup>37</sup> ここでの初出年代の意味は「速度を加える。早くする。いそがせる。」である。「期日を繰り上げる。時刻を早くする。」の初出年代は17C中『説経節・をくり(御物絵巻)』である。

<sup>38</sup> 〈薄める〉vs. 〈薄まる〉は初出年代の差が100年離れていないため、(34)表の「初出年代にそれほど差が見られない形容詞派生動詞」に分類されるが、近現代における文献量等を考慮すると、むしろ「自動詞が遅れて生まれてくる形容詞派生動詞」と振る舞いを同じくしている可能性がある。

と言えるだろう<sup>39</sup>。杉岡 (2002) は、英語の形容詞派生動詞には、他動詞と自動詞双方の用法を持つタイプのものか、他動詞のみの用法を持つものしか存在しないことから、基本的に他動詞形をベースとして捉え、自動詞形を派生形としているが、上記のデータから日本語の形容詞派生動詞も、典型的には他動詞形がベースになっており、自動詞形が派生形になっていると解釈することが出来る。また、杉岡 (2002) が指摘する形容詞派生動詞の特徴の一つである、「変化の自律性」という特質については、(39)の「自動詞が遅れて生まれてくる形容詞派生動詞」及び(40)の「初出年代にそれほど差が見られない形容詞派生動詞」の双方に、総じて当てはまると考えられ、両者の語群で適応の度合いに差は見られないと考えられる。

一方で、段階的な程度変化 (degree achievement) については、両者の語群の間で適応の度合いに違いが見られる。「自動詞が遅れて生まれてくる形容詞派生動詞」では、自動詞形を「ーている」形式にしたときに、結果残存の解釈のみならず、進行中の解釈も比較的生じやすいのに対して (=35)、「初出年代にそれほど差が見られない形容詞派生動詞」では、進行中の解釈が生じにくく、結果残存の読みが強くなると考えられる (=36)。

### (35) 自動詞が遅れて生まれてくる形容詞派生動詞と「ーている」形式

(進行中/結果残存)

- a. 中国語のニーズが年々高まっています。 (Yahoo!ブログ)
- b. 訪問販売の手口はますます巧妙になり、詐欺まがいの被害が広がっています。 (木元錦哉・佐藤圭吾・春日寛『悪質商法 被害例と救済法』)

<sup>39</sup> 今回の調査において、〈ぬくもる〉vs.〈ぬくめる〉という対が、それぞれ 1275『名語記』、1603-04『日葡辞書』を初出としており、他動詞形が自動詞形に対して 100年以上遅れて生まれていたが、この対は他の対に対して異なる形態を持っており、例外的なものであると考えられる。

<sup>40</sup> 現代語において〈速める〉vs.〈速まる〉は一般的に「速度・スピード」を問題にし、〈早める〉vs.〈早まる〉は「期限、時期、時刻」を問題にすると考えられる。両者は現代語において別語と考えることも出来るが、本研究では、『日本国語大辞典 精選版』の〈早まる〉の語釈がこれらを明確に区分しておらず、意味の違いによる対応の区分をすることが困難であったため、これらを同一の語と見なし、自動詞形と他動詞形の『日本国語大辞典 精選版』に掲載されている最も古い用例を初出年代として見なした。もし、『日本国語大辞典 精選版』の語釈から、〈早める〉を「期日を繰り上げる。時刻を早くする」、〈早まる〉を「度を過ぎて早くする。急ぎすぎる。多く、あわてたり、あせったりして、判断を誤り、軽はずみなことをすることにする。」で対応をなすと考えると、他動詞形の方が 100年以上遅れて生まれることになるが、これは一つの語が意味変化したことによるものであると考えられるため、「他動詞が遅れて生まれてくる自他対」とは見なさないことにする。

- c. 50年代の家計支出には40年代と比べ自由裁量の余地が相対的に狭まっていること、とりわけ、可処分所得が実質減少となった55、56年には、そうした裁量度の低下が一層顕著であったことは否定し難い。

(経済企画庁『国民経済白書』)

- d. 具体性に執着する心が、歳を重ねても衰えることなく、さらに深まっています。

(辰濃和男『文章の書き方』)

(36) 初出年代にそれほど差が見られない形容詞派生動詞と「-ている」形式

(?進行中/結果残存)

- a. 土が固まっているところは、ほぐせばいいです。 (Yahoo!知恵袋)

- b. 毛布がグシャグシャになって、床にまるまっている

(緒島英二『怪物ばあさんのおくりもの』)

佐野(1998)は、程度副詞研究の立場から、段階的な程度変化を表す動詞<sup>41</sup>にも、「いったん成立した結果状態が更に変化する可能性を持つ」(佐野 1998: 8)タイプのもの(「進展性に限界を持たない動詞」)と「変化の結果成立した結果状態が更に変化する可能性を持たない」(佐野 1998: 8)タイプのもの(「進展性に限界を持つ動詞」)があることを指摘した。佐野(1998)によれば、前者は〈非常に〉や〈とても〉のような、結果状態の程度を表す副詞と共に共起出来るのに対して、後者は、〈だいぶ〉、〈かなり〉、〈少し〉等の変化の度合いを表す副詞としか共起出来ないという<sup>42</sup>。

<sup>41</sup> 佐野(1998)では、森山(1988)の用語を使用し、「進展性を持つ動詞」としている。

<sup>42</sup> 佐野(1998)では「進展性に限界を持たない動詞」及び「進展性に限界を持つ動詞」として、それぞれ(vii)(viii)のような動詞が挙げられている。

(vii) 「進展性に限界を持たない動詞」(佐野 1998: 11)

〈温まる〉、〈冷える〉、〈(肌が)焼ける〉、〈高ぶる〉、〈寂れる〉、〈色づく〉、〈汚れる〉、〈濁る〉、〈腫れる〉、〈酔う〉、〈湿る〉、〈(「こころが」)晴れる〉、〈疲れる〉、〈太る〉、〈痩せる〉、〈慣れる〉、〈弱まる〉、〈衰える〉、〈悪化する〉、〈やつれる〉、〈荒れる〉、〈ほぐれる〉、〈(ものが)傷む〉、〈増える〉、〈積もる〉、〈減る〉、〈進む〉、〈上がる〉、〈伸びる〉、〈縮む〉、〈変わる〉、〈広がる〉、〈広まる〉、〈(差が)開く〉、〈遠ざかる〉、〈(スピードが)加わる〉、〈(後ろに)下がる〉、〈(前に)出る〉、〈(人が)近づく〉

(viii) 「進展性に限界を持つ動詞」(佐野 1998: 12)

〈暮れる〉、〈(日が)沈む〉、〈治る〉、〈腐る〉、〈溶ける〉、〈(建物が)できる〉、〈冷める〉、〈枯れる〉、〈(夜が)明ける〉、〈(魚が)焼ける〉、〈崩れる〉、〈(不安が)消える〉、〈沸く〉、〈凍る〉、〈固まる〉、〈おさまる〉、〈(傷が)ふさがる〉

- (37) a. 体が {だいぶ/かなり/少し/非常に/とても} 温まった。 (佐野 1998: 8,(4))  
b. 領土が {だいぶ/かなり/少し/非常に/とても} 広がった (佐野 1998: 8,(5))  
c. 氷が {だいぶ/かなり/少し/\*非常に/\*とても} 溶けた。 (佐野 1998: 8,(2))  
d. 湯が {だいぶ/かなり/少し/\*非常に/\*とても} 沸いた。 (佐野 1998:12,(29))

「自動詞が遅れて生まれてくる形容詞派生動詞」は (37a) (37b) のように、〈非常に〉、〈とても〉という副詞と共に起ることが出来るのに対して、「初出年代にそれほど差が見られない形容詞派生動詞」である〈固まる〉〈丸まる〉は (38) のように、〈非常に〉、〈とても〉と共に起しにくいことから、「進展性に限界がある動詞」として位置づけられる。

- (38)a. コンクリートが {だいぶ/かなり/少し/\*非常に/\*とても} 固まった。  
b. 鉛筆の先端が {だいぶ/かなり/少し/\*非常に/\*とても} 丸まった。

佐野 (1998) が指摘する「進展性に限界を持つ動詞」を段階的な程度変化 (degree achievement) を持つ動詞の一部として位置づけることの妥当性については、検討の余地がある。しかしながら〈温まる〉、〈広がる〉のような「進展性に限界を持たない動詞」は、基本的に終結点が想定されにくいいため、段階的な程度変化の解釈がより強くなるのに対して、〈溶ける〉〈沸く〉のような「進展性に限界を持つ動詞」は、終結点が強く意識され、段階的な程度変化の解釈が相対的に弱くなると考えられる。

「自動詞が遅れて生まれてくる形容詞派生動詞」は、段々とある状態に向かっていくという段階的な程度変化 (degree achievement) の性質が強く、変化の終結点が想定されにくいのに対して、「初出年代にそれほど差が見られない形容詞派生動詞」に分類される〈固まる〉と〈丸まる〉は、段階的な状態変化の解釈が相対的に弱く、変化の終結点が強く意識される傾向にあると言える。また、「自動詞が遅れて生まれてくる形容詞派生動詞」では、「\*太郎が狭まる」、「\*太郎が清まる」、「\*太郎が低まる」のように、有情物を対象に取ることが出来ないものが多いのに対して、「初出年代にそれほど差が見られない形容詞派生動詞」に分類される〈固まる〉及び〈丸まる〉は

(39) (40) のように、対象に有情物を取ることが出来、この点も他の形容詞派生動詞に比べて特異な点であると考えられる<sup>43</sup>。

- (39) a. 鷺は、人間たちが大勢固まっているのを眼下に見て、少し弧を描いてその場にとどまった。 (『野性時代』)
- b. 広樹も驚き固まっていた。 (あづみれいか『夢見る夢子』)
- (40) a. 豊かな黒髪がその細い肩から背に流れ、畳を越えて床に広がるさまは、その膝の上に猫が丸まっている姿も含めて、まるで物語の中の姫君のようだ。 (宮乃崎桜子『歳星天経』)
- b. 次に気がついたときは、ハリーはベッドの中でぬくぬくと丸まっていた。 (J.K.ローリング作/松岡佑子訳『ハリー・ポッターと不死鳥の騎士団』)

以上見てきたように、形容詞派生動詞の自他對の多くは、他動詞形をベースとし、自動詞形が派生形であると捉えられるが、そうした中で初出年代にそれほど差が見られない〈固まる〉vs.〈固める〉、〈丸まる〉vs.〈丸める〉は、変化の終結点が強く意識され、段階的な程度変化 (degree achievement) の解釈が相対的に弱くなる点と、対象に有情物を取る得るといふ点において特殊な振る舞いをしていると考えられる。

---

<sup>43</sup> 〈温まる〉 vs. 〈温める〉は「自動詞が遅れて生まれてくる形容詞派生動詞」に分類されるが、(ix) のように有情物を取ることが出来るため、対象に有情物を取り得ることが、必ずしも「初出年代にそれほど差が見られない形容詞派生動詞」になるとは言い切れない。

- (ix) 焚き火の周りにはたくさんの人が暖まっていました。 (Yahoo! ブログ)

しかしながら、〈温まる〉、〈固まる〉、〈丸まる〉という動詞において、対象に有情物を取り、かつ「ーている」という形式を持つとき、〈温まる〉は「今、温まりつつある。(まだ温まりきっていない)」という「進行中」の解釈が生じやすいのに対し (=x a)、〈固まる〉〈丸まる〉は、「今固まりつつある(まだ完全に固まっていない)」「今丸まりつつある(まだ完全に丸まっていない)」という解釈は生じにくく、「固まった後の状態が続いている」「丸まった後の状態が続いている」という結果残存の解釈しか出てこないことから (=x b-c)、両者の性質には違いがあると考えられる。

- (x) a. 焚き火の周りにはたくさんの人が暖まっていました。 (進行中/結果残存) (=ix)
- b. 鷺は、人間たちが大勢固まっているのを眼下に見て、少し弧を描いてその場にとどまった。 (??進行中/結果残存) (=39a)
- c. 豊かな黒髪がその細い肩から背に流れ、畳を越えて床に広がるさまは、その膝の上に猫が丸まっている姿も含めて、まるで物語の中の姫君のようだ。 (??進行中/結果残存) (=40a)

## 5. 結語

本稿では、日本語の自他對の中で、接辞 {-ar-} を含む自動詞と対応する他動詞の對について取り上げ、『日本国語大辞典 精選版』における初出年代をもとに、自他對の特質について大まかな分析を行った。これらの自他對は、凡そ歴史的に自動詞が遅れて生まれてきたものと、そうでないものに分類することが出来る。形容詞派生動詞を除いて、「自動詞が遅れて生まれてくる自他對」には、相対的に受動詞類や可能の意味を表す動詞が多く含まれるのに対して、「初出年代にそれほど差が見られない自他對」及び「他動詞が遅れて生まれてくる自對」には、位置変化を表す動詞が多く含まれる。尚、付着の意味を表す動詞や、物体の状態変化及び事象の状態変化を表す動詞は、どちらの動詞群にも数多く見られる。また、「自動詞が遅れて生まれてくる自對」は、自動詞の主語（対象となる名詞句）が無情物もしくは、文脈上意志を持たないと考えられる有情物になるものが多く、自動詞が表す事象が成立するために、何らかの外的な力が必要となるケースが多くなるのに対して、「初出年代にそれほど差が見られない自對」、「他動詞が遅れて生まれてくる自對」では、自動詞の主語（対象となる名詞句）が有情物になるものが比較的多く、対象にもともと備わっている性質や、対象そのものの意志によって、自動詞が表す事象が成立することが出来ると解釈されるものが多くなる。

一方で、形容詞派生動詞では、派生パターンに依らず、一律に自律的な状態変化を表す傾向にあるが、自動詞が遅れて生まれてくるものとそうでないもので、段階的な程度変化 (degree achievement) の点において差が見られる。〈深める〉vs. 〈深まる〉、〈弱める〉vs. 〈弱まる〉等、自動詞が遅れて生まれてくる形容詞派生動詞は、ある状態に向かって段々と変化していく様子が比較的読み込みやすいのに対して、〈固める〉vs. 〈固まる〉、〈丸める〉vs. 〈丸まる〉のような、両者の初出年代の差にそれほど違いが認められない形容詞派生動詞では、段階的な程度変化を読み込みにくく、変化の終結点に対する意識が相対的に強くなると推察される。また、自動詞が遅れて生まれる形容詞派生動詞は典型的に、無情物が対象になるのに対して、初出年代にそれほど差が見られない形容詞派生動詞では、有情物も対象になり得るという点も両者の相違点であると考えられる。

本研究では、自對の派生関係を分析するために『日本国語大辞典 精選版』における語の初出年代を指標とした。もっとも、本来個々の語について、正確な出現時期を調査するためには、子細な文献調査を行う必要がある。しかしながら、ナロック

(2007b)や本研究のように、現代語における数多くの語の派生関係を体系的に把握する手段として、『日本国語大辞典 精選版』等、辞書に記載されている用例の初出年代を一つの目安とすることは必ずしも外的な手法ではなく、客観的に語の出現時期を把握する上で有効な手法ではないかと考える。本研究での動詞の分類は、筆者の内省に基づくものであり、客観的な基準に基づくものではない。動詞の特徴について正確に記述するために何らかのテストによる動詞の分類を行う必要があると考えられるが、この点については今後の課題としたい。

### 参考文献

- 奥津敬一郎 (1967), 「自動化・他動化および両極化転形: 自・他動詞の対応」『国語学』70, pp.46-66.
- 影山太郎 (1996), 『動詞意味論: 言語と認知の接点』くろしお出版.
- 川野靖子 (1997), 「位置変化動詞と状態変化動詞の接点: いわゆる「壁塗り代換」を中心に」『筑波日本語研究』2, pp.28-40.
- 川野靖子 (2001), 「いわゆる「壁塗り代換」における動詞の条件」『筑波日本語研究』6, pp.61-72.
- 川野靖子 (2006), 「現代日本語における位置変化構文と状態変化構文の交替現象: 格成分の対応の仕方」『日本語の研究』2(1), pp.32-47.
- 佐藤琢三 (1994), 「動詞の自他対応と様態指定」『筑波応用言語学研究』1, pp.21-32.
- 佐野由紀子 (1998), 「程度副詞と主体変化動詞との共起」『日本語科学』3, pp.7-22.
- 須賀一好 (1980), 「併存する自動詞・他動詞の意味」『国語学』120, pp.31-41.
- 杉岡洋子 (2002), 「形容詞から派生する動詞の自他交替をめぐって」伊藤たかね編『文法理論: レキシコンと統語』東京大学出版会, pp.91-116.
- 杉本武 (1991), 「二格を取る自動詞: 準他動詞と受動詞」仁田義雄編『日本語のヴォイスと他動性』くろしお出版, pp.233-250.
- 高橋英也 (2015), 「日本語の使役起動交替に対する形態統語的アプローチ」『リベラル・アーツ』岩手県立大学共通教育センター『リベラル・アーツ』編集委員会, 9, pp.35-45.
- ナロックハイコ (2007a), 「日本語自他動詞対における有標差の動機付け」角田三枝・佐々木冠・塩谷亨編『他動性の通言語的研究』くろしお出版, pp.295-306.
- ナロックハイコ (2007b), 「日本語自他動詞対の類型論的位置づけ」影山太郎編『レキシコンフォーラム (3)』ひつじ書房, pp.161-193.

- 新沼史和・木戸康人(2016),「コーパスを利用した日本語の ar 自動詞の形態統語論的分析」小川芳樹・長野明子・菊地朗編『コーパスからわかる言語変化・変異と言語理論』開拓社, pp.266-282.
- 西尾寅弥(1954),「動詞の派生について: 自他の対立の型による」『国語学』17, pp.105-117.
- 早津恵美子(1987),「対応する他動詞のある自動詞の意味的・統語的特徴」『言語学研究』京都大学言語学研究会, 6, pp.79-109.
- 孟熙(2011),「受動詞についての一考察: 自動詞におけるその位置づけを中心に」『筑波応用言語学研究』18, pp.79-93.
- 森山卓郎(1988),『日本語動詞述語文の研究』明治書院.
- Dowty, David (1979) *Word Meaning and Montague Grammar: The Semantics of Verbs and Times in Generative Semantics and in Montague's PTQ*, Reidel, Dordrecht.
- Matsumoto Yo (2000) Causative Alternation in English and Japanese: A Closer Look. *English Linguistics*, 17-1, pp.160-192.

#### 用例・資料出典

- 北原保雄編(2010),『明鏡国語辞典第二版』大修館書店.
- 国立国語研究所『現代日本語書き言葉均衡コーパス・NINJAL LWP for BCCWJ』
- 小学館国語辞典編集部編(2006),『日本国語大辞典精選版』小学館.
- ナロックハイコ・ブラシャントパルデシ・影山太郎・赤瀬川史朗(2015),『現代語自他対一覧表 Excel版』(<http://watp.ninjal.ac.jp/resources/>)

#### 付記:

本稿は、2018年12月に筑波大学大学院人文社会科学研究科に提出した修士論文の一部(第3章)に加筆・修正を加えたものである。本研究全般にわたり多大なるご指導を賜った先生方、並びに院生時代の授業・ゼミ等において、貴重な御教示を賜った筑波大学日本語学研究室・応用言語学研究室の院生の皆様に対し、ここに記して深く感謝申し上げます。

せきぐち ゆうき／栃木県立大田原高等学校教員